

無想録 二十三 余善をそしるなかれ

小郡駅で汽車を待つ間に、子供を抱いて外に何か用事のある方が、赤ちゃんの処置に困っている。釜瀬君がお守りしましょうとて、お抱きした。女の方は走って用事に行き、帰られてたいへんお礼を言っておられた。

汽車の中で、家内が林檎をむいで、子供にやっている時、今汽車から降りようとする人の子供がじつとこちらをむいてほしそうにしている。半分をその子供に差し上げると、子供はすぐさま口にもっていった。その親は二度三度厚い礼を言っ出て行かれた。

「どうぞどこにおかけ下さい。」とて座をすすめられる。その汽車にいる間、明るい気がする。

瀧鶴台の妻が、赤いまりと白いまりを夫に見られて、恥じらいつつ、よい心のおきた時は赤いまりに、悪い心のおきた時は白いまりにまきつけていると告げた話は、小学校の修身書にあった。たったあれだけのことかと思ったら間違いだ。瀧鶴台先生は、山口県右田藩(右田支部のある村)の儒者である。この先生の裏に一生内助の尊いものが光りつづけていたそうだ。右田村の生家の跡には大々的な記念塔ができるとのことである。

小さい善、積尊は時に盲人の世話やら、病人の看護までされた。大善は小善となつて現われる。

日常の生活行動に小善の伺われない人には、けつして大事はまかされない。小善がなければ小悪がある。小悪もやがて、千里の堤をこわす蟻の穴となる。大悪となる。

何日宿つても、箒一つ持たない女は、やがて身の置き所がなくなる。

宿屋の便所に行つてみる。壁に一ぱい落書きがしてある。書に対する教養がないからだ。人が見ていないからこの小悪を平気でする人が、大きな舞台で跳りはじめると、きつとその肩書を傷つける。

小善を認めてそれに絶対の意味を打込んで下さるところに大聖の信境があつた。

世尊に対する純陀の微少なる供養が、未来世の成仏に働いた。

子供の小善を見て喜ぶ親の大歓喜は、子供の大悪を見て泣く親の態度よりも重い結果をまねく。

米国の父ワシントンの父親は、大事な庭樹すべてを切られたよりも、切ったことを正直に白状したその子の正直であったことの方を喜んだ。

信じきる学校の先生から褒められた一言は、一生涯脳裏を去らない。そしてそこに認められた美点長所が一生かけて伸びてゆく。

悪をにくんで裁くだけで、善を少しも喜んでくれない人の前では、人の心の尊い芽生えは霜枯れてしまう。

霜雪は生長をひきとめて、内に堅くし、春の温かさは、芽を葉を伸ばしきってゆく。

疑われることの苦しさに、人を疑うまいと決心し、裁かれ、非難され、誤解され、怒罵されてみて、人を裁くまい、非難すまい、誤解悪罵してはならないと自らを誡める。

唇と声帯とが動いてもものを言う。いかにも小さいことである。

言った方はその場で忘れても、聞いた方は一生涯忘れられない場合がある。

東伯支部の松山ひめのさんは、小鴨村のために働いている。今ごろはゴム裏草履の副業をおこすために言語に絶する辛苦をおしきっている。日本海から寒い風の吹いているある日、赤崎駅？についている草履の材料をとりに行つたが、駅の保管料やら、代金やらがなかったために受け取られない。それにあてにしていた人は留守である。駅長さんにご相談しようと思えばこれもまたお留守である。今とらねば組合員には2申しわけがない。困りはてている時、ぽんと二十円なげ出してこれで受け取つて帰りなさいと告げて急いで汽車に乗ろうとする方がある。名前さえ知らない。走りよつてお問いとすると、市勢小学校の竹本先生であった。

自分自身の窮迫をもともせず働き通している松山さんのすべてを知る私は、松山さんの、その時の心境を思うて涙した。竹本先生とやらよくしてやつてくださいました。松山を奮起さすのには、これだけで充分です。

親鸞聖人は『唯信鈔文意』に

「恒沙の善根を修せしめしによりて今大願業力にまうあふことを得たり。他力の三信心を得たらん人はゆめゆめ余の善をそしり、余の仏聖をいやしうすることなかれとなり。」

と誡められた。

「悪業をば恐れながらすなはち起し、善根をばあらませども得ること能はざる凡夫なり。……ただ仰ぎて仏智を信受するに如かず。」

との他力の信境は、けつして善を無視するものでも軽んずるものでもない。悪業をば恐れながら……即ちおこし……善根はあらしめたいと求めつつ得ること能わぬ凡夫である。善を尊び悪をおそればこそ至り得るのが他力の大神海である。

善を行じつつ、善を忘れ、悪を悪として認識して、善悪を超える所に他力の大信心海はある。

善の糸をたぐらんとして、悪の重きを知り、悪自体を転じて大善たらしめ給う如来の本願を仰ぐの心である。

行ずる善を代償として、幸福を神仏に求めんとする時、その功利的な心に反省と批判の智慧は働かねばならないが、しかしそれはけっして、善それ自身を滅ぼさんとするのではない。

念仏が大善だからとて、これを固定化し、偏執して、他の善をけなしたり、軽んじたりする生き方には、おそらく念仏もまた無生命な概念的なものになるであろう。

真如界から流れ出る大善大行はやがて、人間の身口意三業の上にさまざまな善となつて表われるであろう。

小善なきを悲しむあまり、如来を疑うのは許すべからざるはからいであるが、如来ましますとて小善を軽んずることも人間生活のつまづきである。

中国の聖者は「戦々兢々きょうきょうとして薄氷をふむがごとし」と言われた。われらもまた、善は小なりとも行ない、悪は小なりとも怖れて、生きさせていただけようと切念する。